Pichari ～ピチャリ～
七飯町歴史館だより
第183号

ななえ古写真物語
VOL.183

蓴菜沼のあゆみ

絵葉書「大沼公園の風光」より

大正時代か

西大沼地区

「幽邃の氣あふるる蓴菜沼」とは、写真右下に綴られた文言である。この情景を端的に表現したものなのだろう。写真を見ると、眼前に広がる蓴菜沼の船着き場とおぼしき場所に、傘をさした着物姿の女性と、足だけ湖に浸かる女の子の姿が描かれている。湖面に写る植物は、コウホネなのだろうか、判然とはしないが、水面の一部に繁茂している様子がうかがえる。この写真は「大沼公園の風光」という絵葉書のうちの一枚である。

大沼三湖の中でも、流山地形が少ないため、結果的に島が少ない印象の蓴菜沼は、湖の大きさは最も小さいのだが、景色に趣きがあり不思議な静けさを感じる。そう考えると絵葉書にしるされた「幽邃」とは言い得て妙で、大沼にある湖沼群の中でも、蓴菜沼を好む声を耳にするのも、そういった存在感がありながらも醸し出される静けさが理由なのかもしれない。

かつて英国女性旅行家イザベラバードが、蓴菜沼にあった宮崎旅館を訪れたことを日誌に記しているのことは、蓴菜沼を語るうえで外せない歴史である。そのことについは、ピチャリ第8号でふれているので、参照いただきたいのだが、湖面をとりまく木々と山の稜線から、撮影場所は、宮崎旅館のあったあたりと推測する。

蓴菜沼は、今でこそワカサギ釣りで冬季間は賑わいを見せるが、それ以外の時期では、観光客が頻繁に訪れる場所ではなくなってしまった。しかし、開拓使によって明治５年に道路が整備されたこともあり、函館方面からの観光の適地とされ、旅館もいくつか建った。現在の大沼公園よりも先に観光地として知られた場所である。湖の名称も往時は蓴菜沼ではなく、小沼や白鳥の沼だったという経緯は、ピチャリ第41号に記したので、併せてごらんいただきたい。

ちなみに、大沼のワカサギは、開拓使によって網走湖から移入されたのがはじまりといわれ、ほかにもコイやフナも移入している。厳密にはそれ以降も、何度か他所から移入しているので、大沼や蓴菜沼は、本来の自然が可変されているのだが、あまり知られていない。しかし百年以上もの月日を重ねた現在も、独自の生態系を形成し保っているのだから、外来種を受け入れつつも、在地の生物との調和をはかる自然の奥深さを感じずにはいられない。

幽邃なる蓴菜沼のあゆみには、自然を可変したヒトの歴史が垣間見れる。こちらを振り向く写真の女の子に、これから先（この自然は）大丈夫？と問われている気がしてならない。

日進月報 <2023. 2>

1日 考古学な夜

夜の博物館第３夜は、七飯町の考古遺物蒐集の先駆者であり、『大中山村誌』を編さんした高橋秀雄氏のコレクションのお話。現在再整理を行っている遺物です。戦中戦後の七飯の考古遺物の蒐集に力を注いだ高橋氏。その数約260点。イレギュラーな文様構成、聖山式土器との関連性を検証するのに大きな役割を果たすコレクションです。受講者の皆さんには、実物を近くでご覧頂き、再整理は再発見につながるということを感じてもらえたと思います。

25日 ワカサギを釣る一日

2月のジュニア探検クラブは、ワカサギ釣り。自分たちで決めたプログラムです。釣り方は、動画でも確認ください。との連絡をうけ、事前勉強。便利な時代になったものです。さて、実際に釣るとなるとやはり動画のようにうまくはいかないもので、中々釣れない子、寒さで指が動かなくなる子、針がウェアーに引っかかる子など様々。それでも、ほとんどが釣りあげ、唐揚げを堪能しました。寒かったですが、大沼の冬を味わう一日を過ごしました。

企画展「旅の記憶、旅の記録」が始まりました。

昭和の歌謡曲は、悲しいことがあると北へ向かうという曲がありました。古くはSL、連絡船、夜行列車など、旅情を慰める風景や楽しい思い出と懐かしい気持ちに浸れるのが、今回の企画展です。町内の廃駅の資料は、時刻表や駅のベンチ、硬券切符や記念切符、旅の思い出に買った古い絵はがきなども展示しています。壁には日本地図を用意し、旅したことがある場所にピンを差し、参加して頂く展示も企画しました。ぜひ足をお運び下さい。

4月の予定

1	土	企画展OPEN
2	日	
3	月	
4	火	
5	水	
6	木	
7	金	
8	土	
9	日	
10	月	
11	火	
12	水	
13	木	
14	金	
15	土	
16	日	
17	月	
18	火	
19	水	
20	木	ピチャリ第184号発行
21	金	
22	土	
23	日	
24	月	
25	火	
26	水	
27	木	
28	金	
29	土	ジュニア探検クラブ
30	日	

※4月の休館日はありません

哀愁の駅

写真は仁山駅。個人的に哀愁を感じる駅です。無人駅のひっそりとした佇まい。駅舎の背後には仁山、木々のざわめきや鳥の声も感じられる駅です。

編集後記 ～tawagoto～

最近読んだ本で、禅のことばに「放てば手に満てり」という言葉があると知った。今持っていない何かを手にいれたいときは、まずは握りしめているものを手放さなければ、それを手に入れることはできないという意味らしい。仕事や人間関係、日々の暮らしの中にも、執着から離れ、身を軽くし、新たなものに向かうのはなかなかに難しいこともある。子どもたちや若い人に接しているとその柔軟さが羨ましく感じてしまう今日この頃。

Pichari ～ピチャリ～
第183号
令和5年3月20日発行
七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町６丁目１－３
電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182
E-mail：rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp